

教師にとって大事な業務とはなにか

—自由回答における授業に関する記述の分析を通して—

白旗 希実子 (東北公益文科大学)

石井 美和 (東北文教大学短期大学部)

荒井 英治郎 (信州大学学術研究院総合人間科学系)

1. はじめに

現在、教師の多忙化や負担感の増加などを背景に、教師の担う業務の明確化・適正化のあり方が政策的に議論されている。

2015年の中教審答申では、「国、教育委員会は、教員が授業や生徒指導等に自らの専門性を発揮するとともに、授業準備や研修等に時間を充てることにより、その資質を高めることができるよう、教員の業務を見直し、事務職員や他の専門スタッフの活用を推進する」と述べられ、チームとしての学校像が示された¹。また、2019年の中教審答申では、学校における働き方改革は、「...教師が疲労や心理的負担を過度に蓄積して心身の健康を損なうことがないようにすることを通じて、自らの教職としての専門性を高め、より分かりやすい授業を展開するなど教育活動を充実することにより、より短い勤務でこれまで我が国の義務教育があげてきた高い成果を維持・向上することを目的とするものである」と述べられている²。

このように、教師の業務の明確化・適正化に関する議論からは、教師が限られた時間のなかで授業準備等に時間を費やすことができる環境を整えることで、教師自身の専門性を高め、よりよい「授業」を行うことができるように改革を進めていこうとする、1つの流れを看取することができる。しかし、これまで教師の仕事の特徴の1つとして「無境界性」が挙げられており³、授業は他の業務と明確に切り離して捉えることができない可能性がある。従って、このような政策動向は、教師たちに、彼らが業務の中核に位置づけていると思われる「授業」のあり方をどのように捉えるのか、また他の業務との関係において「授業」をどのように位置付けるのかなど、教師一人ひとりの授業観を問い直すことを改めて要請するものとなっている。

そこで、本稿では、小学校教師に対するアンケート調査の量的・質的な分析結果から、小学校教師の考えるもっとも大事な業務に対する認識のあり方を問うことを通じて、教師が

いかなる文脈において「授業」を捉えているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 授業とは

「授業」とは、何か。佐藤（1996）は、「これまで一般に『授業』と言われてきたものは、特定の教科の内容を具体化した教材を媒介として、子どもたちを一定の知識や技能や能力の獲得へと導く活動を意味していたと言ってもよい」が、「教室における子どもの経験と教師の経験は、この定義に見られるような認知的領域にとどまるわけではない」と指摘する⁴。そして、「教育の実践（授業と学習）とは、『世界づくり（認知内容の編み直し＝対象との会話）』と『仲間づくり（対人関係の編み直し＝他者との対話）』と『自分探し（自己概念の編み直し＝自己との対話）』の三つが総合された複合的なものとなみなのである」と述べる⁵。

また、白井（2001）は、日本の教師の役割遂行に対する意欲が低下しない理由の1つとして「授業づくり」という日本の教師たちの特徴的な考え方を挙げ、授業を「つくる」ことの一つの意味には、「子どもたちを指導の対象者というよりも授業という場における教師と対等にして別の役割を持つ参加者としていっしょに何かの発見をしたり、新たなことに気づくことを目指すこと」があり、そのためには、「授業を作ることと学級を『つくる』ことが不即不離の関係となる」と述べている⁶。

上記は、学級と授業の関係性について言及したものであるが、白松（2017）によれば、「学級経営」は「学級における担任の全ての仕事に関わる用語」であり、学級経営に関わる仕事の幅が広いからこそ、教師の「学級経営観」は多様になりやすいという⁷。また、特に「『学習指導のための条件を整備すること』という学級経営観と、『児童生徒とともに、人間関係や文化を創り、よりよい学級を創ること』という学級経営観は、しばしば学校の中で対立を生んで」きたと指摘する⁸。そして、「教師の仕事の中心は教科の授業である」という教育観をもつ教師は、「『教科の授業』のための学級経営を重視」するという⁹。

このように、「授業」を捉える視点として、学力の形成を重視する考え方もあれば、人間形成や教師自身の成長を促すものという視点を包含する考え方もある。また、授業を学級経営と関連づけて捉える視点もあるが、そうした学級経営観自体、多様であるという。このように「授業」を捉える視点が多様な中で、教師たちは「授業」についてどのように認識し、アンケート調査における自由回答項目において記述するだろうか。

3. 調査概要

2018年7月～9月にかけて、小学校182校の「常勤で務める教員」で「子どもたちの教育に携わっている方」4719人を対象に、アンケート調査を実施した。対象地域は、大都市圏

ではない地方の X 県（2 市）、Z 県（6 市）である。郵送調査（X 県内 1 市）及び教育委員会や校長会等を通しての配布・回収を行い、有効票は 2380 票、有効回収率は 50.4%であった。調査実施については東北公益文科大学の研究倫理審査において承認を受けている。

回答者の性別は、「男性」は 966 人、「女性」は 1405 人で、年齢は、30 歳までが 345 人、31 歳～40 歳が 308 人、41 歳～50 歳が 655 人、51 歳以上が 1006 人、回答者のうち「学級担任」は 1533 人、「管理職」は 214 人であった。

本稿の分析には、自由回答項目の「教師の業務のなかで、もっとも大事だと思うことは何ですか。その理由も教えてください」について、「教師の業務のなかで、もっとも大事だと思うこと」（以下、もっとも大事だと思うこと）、あるいは、「教師の業務のなかで、もっとも大事だと思うこと及びその理由」（以下、もっとも大事だと思うこと及び理由）について回答のあったものをデータとして使用した。2380 人のうち 1461 人から自由回答への記述があり、そのうちの有効回答数は 1404 であった。1404 人のうち、「男性」は 596 人、「女性」は 806 人で、年齢は 30 歳までが 238 人、31～40 歳が 193 人、41 歳～50 歳が 381 人、51 歳以上が 565 人、「管理職」は 135 人、「学級担任」は 953 人であった。

分析の手順は、自由回答記述から「もっとも大事だと思うこと」及び「もっとも大事だと思うこと及び理由」についての記述部分を抽出した後、そのデータを KH coder3¹⁰に読み込み、「回答者ごとの文書（1 人の回答を 1 つのセルに入力）」を対象とした計量テキスト分析を実施した。実施した分析は、「頻出語検索」、「共起ネットワーク」である。その後、計量テキスト分析の結果をもとに、自由回答記述のテキストデータに戻り、記述内容の分析を行った。

4. 自由回答記述の計量テキスト分析の結果

4. 1 自由回答記述における頻出語

自由回答記述のうち、「もっとも大事だと思うこと」（理由除く）に関連する部分を抽出し、回答者ごとの文書で、「名詞」「サ変名詞」「タグ」¹¹のうち、出現回数の多い単語（30 人以上の回答者が記述）を抽出したところ、表 1 のような結果となった。

表 1 小学校教師の自由回答記述における上位頻出語

抽出語	文書数	抽出語	文書数	抽出語	文書数
子ども	491	学級経営	70	力	42
授業	486	生徒指導	69	生活	39
教材研究	173	学力	67	確保	37
教科指導	135	学習	54	生徒	36
児童	114	教科	53	生活指導	33
指導	95	準備	51	教師	31
学習指導	85	児童理解	49	信頼関係	30
充実	73	支援	42		

「子ども」が491、「授業」が486と、3番目以降の出現文書数を大きく引き離している。「子ども」という単語を含めて記述している教師が最も多いことから、教師の業務を語る上で「子ども」は切り離しがたいことが改めて確認できる。

次に、具体的な「業務」の記述に限定すると、「授業」「教材研究」「教科指導」「学習指導」など、「授業」に関連する用語が上位にきていることがわかる。単語の出現数=もっとも大事な業務として挙げた項目ではないことに留意が必要であるが、各単語のテキストデータに戻り記述を確認すると、もっとも大事な業務（の1つまたは一部）として「授業」を挙げている者は441人で、「教材研究」を挙げている者は173人（「教材」という単語を挙げている者のうち教材研究に該当する記述を含めると176人）、「教科指導」を挙げている者は135人（「教科」という単語を挙げた者のうち「教科指導」に該当する記述を含めると171人）、「学習指導」を挙げている者は84人（「学習」という単語を挙げている者のうち学習指導に該当する記述を含めると95人）であった。ここから、もっとも大事な業務として「授業」を挙げる教師が多い傾向にあることが明らかになった。

また、単語間のつながりを確認するために、「もっとも大事だと思うこと」（理由除く）について、回答者ごとの文書で、語の最小文書数30、Jaccard係数0.1以上、「名詞」「サ変名詞」「タグ」「形容動詞」「動詞」（「動詞B」除く）を対象として、共起ネットワーク分析を実施し、サブグラフを抽出したところ、図1のような結果になった。サブグラフは、強い共起関係ほど濃い線で描画されている。

図1からは、「子ども」と「向き合う」ことや「関わる」ことが同じまとまりで示されていること、また、「授業」の「教材研究」や「充実」が同じまとまりとして示されていることがわかる。

5. 「授業」に関する自由回答記述の類型化

前節では、「頻出語検索」において「授業」が業務に該当する最頻出の単語であり、「共起ネットワーク」分析では「授業」と「教材研究」「充実」などの単語とのつながりが確認された。では、教師は「授業」をどのような文脈に位置づけながら記述しているのだろうか。

本節では、「もっとも大事だと思うこと」及び「もっとも大事だと思うこと及び理由」についてのデータを用いて、「授業」という単語が含まれる文書のうち、もっとも大事な業務（の一部）として「授業」を挙げている441文書を対象とし、グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法¹²を用いて、記述の分析を試みた¹³。グラウンデッド・セオリー・アプローチを活用した質的分析を用いたのは、計量テキスト分析では見えづらい、テキストデータの文脈が抽出可能となるためである¹⁴。

その結果、7つのカテゴリーが抽出された。表2は、7つのカテゴリー名とそれを構成

教師にとって大事な業務とはなにか

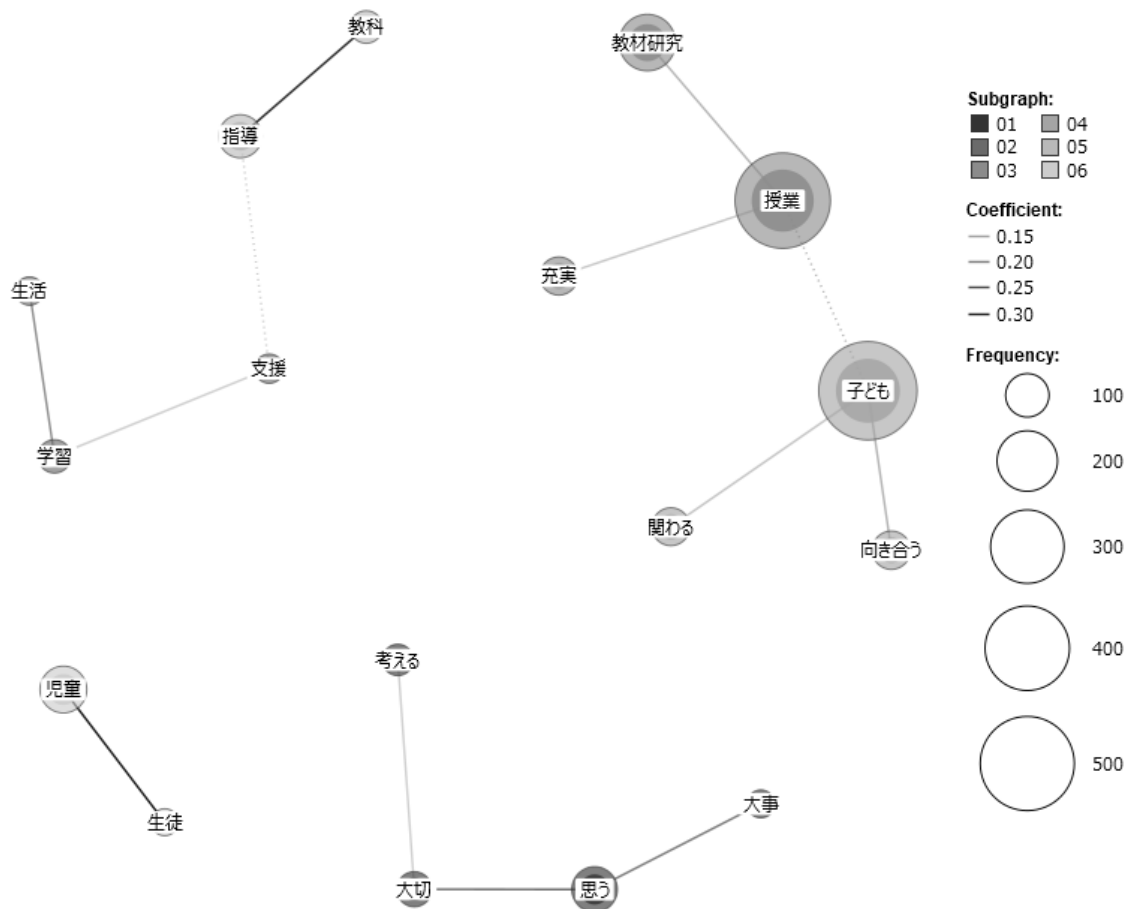


図1 共起ネットワーク分析の結果（業務のみ）

表2 「授業」に関する自由記述の分析から抽出されたカテゴリー及びコード名一覧

カテゴリー名		コード名
1	力をつけるための授業	① 学力をつける授業
		② 生きていくための力をつける授業
2	充実した授業のための教材研究・授業改善	① 充実した授業のための教材研究
		② 反省を活かす授業
3	学級づくりにつながる授業	① 人間関係をつくる授業
		② 両輪としての授業
4	子どもと関わる時間	① 子どもと関わる時間と授業
		② 子どもと関わる時間の一部としての授業
5	わかる・楽しい授業	① 楽しい授業
		② わかる授業
6	向き合い・つくる授業	① 向き合う授業
		② つくる授業
7	もっとも長い時間としての授業	① もっとも長く過ごす時間
		② もっとも長く関わる時間

するコード名を示したものである¹⁵。このほか、カテゴリー化には至らなかったが、授業を基本、根幹として捉える文脈である「基本・根幹としての授業」というコードも抽出されている。

以下、各カテゴリーについて説明する。

5. 1 力をつけるための授業

「力をつけるための授業」とは、力をつけるための場として「授業」を捉えながら語る文脈である。学力の形成に力点が置かれるものと、その他の力にも言及しているものが見られた。

(1) 学力をつける授業

「学力をつける授業」とは、授業を通して、子どもたちに学力を身につけてもらうことが重要であるという文脈である。

「まずは授業の中で子どもの学力を定着させていくことが大切だと思うから。」

「授業を通して子ども達に学力をつけることが大切だと思うから。」

この文脈には、「子どもは学びに来ているから」、「学校は子どもにとって勉強をする場所」など、学びの場として学校をとらえ、そのために、授業が大事であるとする文脈も含まれている。

(2) 生きていくための力をつける授業

「生きていくための力をつける授業」とは、授業を通して子どもたちの力を育てるという文脈である。「生きていくための力」、「全人的な発育」など、学習面にとどまらない記述を含んでいる。

「授業＝子どもが生きていくために必要な資質、能力を得るために、学校における最も重要な時間。」

「子どもをよく知り授業の中で子どもの可能性を伸ばすこと」

5. 2 充実した授業のための教材研究・授業改善

「充実した授業のための教材研究・授業改善」とは、充実した授業のために、教材研究を行ったり、授業実践を反省し次の授業へと活かしていくといった授業改善を重視する文脈である。

(1) 充実した授業のための教材研究

「充実した授業のための教材研究」とは、充実した授業を行うためには、十分な教材研

究を行うことが大事であるとする文脈である。教材研究に時間をかけることが重要であるが、なかなか時間がかけられないという教師もみられた。

「教科等の授業及びそのための教材研究。授業の中で子どもも教師も育つから。」

「教材研究・授業準備・授業の充実。…子ども達にできないことができるようになって欲しいし、『勉強（学校）って楽しい!』と思ってもらいたいから。」

（２）反省を活かす授業

その一方で、授業準備から授業実践、授業の振り返りという一連の流れの中で、授業改善が大事であるとする文脈もみられた。

「子どもが夢中になれる授業を行おうと努力すること。（日々の授業改善を意識すること）
…子どもたちは、向上心、できるようになりたいという願いをもって生活していると感じる。それに応える上で、日々の授業は大切。変化の激しい時代であるだけに、将来の社会を生きる子たちがどのような学びをしていったらいいか、考えたい。」

5. 3 学級づくりにつながる授業

「学級づくりにつながる授業」とは、「授業」を学級経営と関連づけながら語る文脈である。

（１）人間関係をつくる授業

「人間関係をつくる授業」とは、授業を通じた学級づくりについて語られる文脈である。

「授業＝子どもたちが意欲的に活動できる時間が増えれば、学級経営もうまくいくと思うから。」

「…授業が一番の仕事だと思う。授業で学級の雰囲気や子どもの人間関係を作っていかなければいけないから。」

「学級経営と授業。集団生活と集団で学ぶことの基礎になっているから。学級経営がうまくいっていないと、生活や学びもよりよくなるから（授業によって学級経営をしていくから）」

（２）両輪としての授業

「両輪としての授業」とは、授業と学級経営が不可分な関係として語られる文脈である。

「授業の充実とそのため準備および学級経営。わかる授業をすすめることと、学級経営は両輪であり、子どもたちの成長につながると考えます。」

「学級経営と授業。安心、安定した学級の中で、質の高い授業を行うことで、子どもたちがより良い成長をしていくと考えているから。」

5. 4 子どもと関わる時間

「子どもと関わる時間」とは、授業について、子どもたちと関わる時間と併記する、あるいは、包含する形で記述する文脈であり、もっとも記述が充実したカテゴリであった。この文脈では、子どもたちと関わる時間に軸が置かれている。

(1) 子どもと関わる時間と授業

「授業」と「子どもたちと向き合う・関わる時間」あるいは「生活指導・生徒指導」を併記する文脈がある。これらの記述においては、「授業」と「子どもたちと向き合う・関わる時間」あるいは「生活指導・生徒指導」の両者が不可分の関係として記述される。こうした記述からは、子どもたちへの指導には、子どもたちとの「つながり」や「信頼関係」が大切であり、そのために、子どもたちに「寄りそい」、「向き合う」ことや、子どもたちと、ともに「関わり」、「過ごす」ことが大事であるとする教師の考えが垣間みられる。

「子どもと話しふれ合う時間の確保と授業づくり。子どもの心とつながりながら指導しないと、子どもの心にひびかないと思います。授業は教師の本業だと思います。」

「授業、子どもと過ごす時間。様々な学びの促進は授業や子どもと過ごす時間の充実が大切だから。」

「子どもと接する時間、授業などに使うための時間。...子どもを育てるための学校、子どもに向かうための時間が1番大切で必要だと思う。その為の教師。」

(2) 子どもと関わる時間の一部としての授業

また、子どもと関わる時間の一部として授業を捉える視点がある。

「子どもと向き合うこと（授業など）については手を抜きたくないです。」

「子どもと関わる時間（授業やクラスでの活動等）。...教師として最も大切なことは子どもと関わることだと思うから。授業を充実したものにしたり、子どもとの関りを多く持ったりして信頼関係をきずくことが大切だと思う。」

「子どもと共に過ごす時間（授業時間含む）。私たちは目の前の子どもにどれだけのことができるかを探り続ける存在であると思うから。」

いずれにしても、「子どもと関わること」「子どもと向き合うこと」が大事であり、それが授業に特化する形ではなく、授業外の関わりにも言及している点が両者に共通する点である。

5. 5 わかる・楽しい授業

「わかる・楽しい授業」とは、子どもたちが「楽しい」「わかる」と感じるような授業が大事であるという記述である。こうした「わかる・楽しい授業」の文脈には、学ぶ楽しさを伝える、「わかる・楽しい授業」が子どもとの信頼関係の構築や、子どもの学校が楽しいという気持ちにつながるなどの記述がみられた。

「一時間一時間の充実した授業。…未来を担う子どもたちに様々なものの見方、考え方や学ぶ楽しさを伝えることが大切だと考えるから。」

「授業。…子どもたちへの分かりやすい授業は子どもと教師との信頼関係につながると思うから。」

「授業・・・『できる』経験を重ねることで自己肯定感がupし、子どものやる気、元気が出てくるのでやはり『学習がわかるように授業を行う』ことが大事だと思います。」

「授業の充実。授業が楽しくわかることや力をつけることで、学校が楽しくなると思う。ただそのためには、人間関係、その他色々必要なので、授業の為に必要になることは、とても多い。」

5. 6 向き合い・つくる授業

「向き合い・つくる授業」とは、授業を通して子どもたちに向き合うこと、子どもたちと授業をつくっていくことが大事であると記述する文脈である。

(1) 向き合う授業

授業のなかで子どもと向き合うという文脈である。向き合って成長させる方向性としては、学習面を重視する記述と、全人格的な面を重視する記述がみられたが、両者とも子どもの視点に立って考える記述という点で共通していた。

「子どもと向き合って、授業をすること。子どもの願い（勉強ができるようになりたい、友だちと仲よくすごしたい、楽しい学校生活を送りたい・・・）を少しでも実現していくこと。」

「授業を通して子どもと向き合い、その成長を支えていくこと。そのために時間的余裕や心のゆとりを持って教材研究や児童理解に取り組めること。学校の基本は学習、子どもも学習面での自分の成長を望んでいる。」

(2) つくる授業

授業は、教師だけでなく、子どもとともにつくっていくものであるという文脈である。

「...子どもと授業をどう創るのか、子どもたちの力のつく授業のあり方を考えることが教師の一番の業務だと思います。」

「...『できた』『わかった』と感じさせることのできる授業を子どもと共につくっていくこと。子どもの小さな変化に気づいたり成長を感じたりし、励ましていくことがよりよい人間形成につながっていくと考えるから。」

5. 7 もっとも長い時間としての授業

「もっとも長い時間としての授業」というカテゴリーは、時間という視点から、「授業」について記述する文脈である。

(1) もっとも長く過ごす時間

1つは、子どもが学校でもっとも長い時間を過ごすのが「授業」であり、それゆえ、授業を充実することが重要になるという文脈である。

「...子どもが学校にいる時間の大半は授業時間。ここが充実していることが、最も大切であり、1人ひとりの力をつけ、伸ばすことが業務の中心だと思います。」

「日々、充実した授業をすること。子どもにとって最も時間が長く、それによって、学校生活全般の充実度が違ってくるため。」

(2) もっとも長く関わる時間

その一方で、教師が子どもと関わる時間のなかでもっとも長い時間となるものが「授業」であるがゆえに、「授業」が大事であるという文脈がある。

「1日のうちの大半が授業であり、子ども達とつながれる時間だから。」

一方は、子どもの学校で過ごす「時間」という子ども側からの視点であり、もう一方は、教師側からみた子どもと関わる「時間」という視点である。後者の視点には、「子どもと関わる時間」が大事であるという考えが根底にあると考えられる。

6. おわりに

本稿では、小学校教師を対象に実施したアンケート調査における自由回答記述に着目し、教師がもっとも大事だと考える業務に対する認識の分析を通じて、教師がいかなる文

脈において「授業」を捉えているのかを明らかにしてきた。分析の結果、次の点が明らかとなった。

第1に、業務についての記述に着目すると、「授業」という単語の頻出回数が業務に関する記述の中で最も多く、小学校教師の多くが「授業」をもっとも大事な業務（の一部）として捉えていることが改めて確認できた。また、「授業」に関係する単語としては「教材研究」、「教科指導」、「学習指導」などの単語が上位にきており、かつ、「教材研究」の出現回数が多いことから、教材研究についても教師が重要な業務として捉えている可能性が示唆される。一方で、「子ども」という単語の記述が、「授業」を超えていることから、教師の業務は「子ども」を抜きに語るができないことが浮き彫りとなった。

第2に、最も大事な業務（の一部）として「授業」を挙げている教師が、どのような形で記述しているのかを分析したところ、7つのカテゴリーが抽出された。各教師が大事な業務として「授業」を挙げる際、どのような文脈に授業を位置付けているのかという点について、次のような特徴を持つ多様な授業観が自由記述から浮かび上がった。

その1に、授業で育てる力について、「学力面を重視する教師」と「生きていくための力を重視する教師」がみられた。

その2に、充実した授業を行うために、「子どもと関わることを重視する教師」と「教材研究・授業改善を重視する教師」がみられた。

その3に、授業の方法論として、「わかる・楽しい授業を重視する教師」と「子どもたちとつくる授業を重視する教師」がみられた。

その4に、授業を通して、学級経営（学級づくり）を行っていくなど、授業と学級経営を不可分の関係として捉え、両者の関係を重視する教師がみられた。

その5に、授業は、子どもたちと関わる時間の一部であり、子どもと関わるのが大事であるとする教師がみられた。各教師が「子どもと関わる時間」の量・質をどう判断するかによるが、これらの教師の実践は、日本の教師の特徴としてこれまで先行研究で指摘されてきた業務の「無境界性」とつながっていく可能性があるだろう。

以上のように、「授業」を捉える教師の視点は実に多様であることが確認できた。

本稿では「授業」が大事であるとする教師の記述に着目し、その文脈について検討を試みた。今後、教師が、よりよい「授業」を行うことができるように「働き方改革」を進めていこうとするのであれば、こうした教師の多様な「授業観」の文脈を踏まえる必要があるだろう。また、充実した授業を行うために、「子どもたちと関わる時間」が必要であるとするならば、「子どもたちと関わる時間」とは何か、具体的な業務のあり方を問い直すことが不可欠である。

本稿の分析は、小学校教師の自由回答記述の分析結果であり、「授業」について記述した教師の分析に留まっている点で限界がある。今後は、今回の分析結果を踏まえて、本稿で分析の対象としなかった自由回答の記述を含めた分析を行うとともに、教師に対して質

的なインタビュー調査を実施していきたい。これについては他日に期したい。

付記

本研究は、JSPS 科研費「教育領域における専門業務のアウトソーシングと教育専門職の変容に関する実証研究（研究代表者：橋本鉦市）（科学研究費補助金・基盤研究（B）一般）」（17H02661）の助成を受けて実施している。

註

- ¹ 中央教育審議会「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」2015年12月21日、27頁。
- ² 中央教育審議会「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について（答申）」2019年1月25日、7頁。
- ³ 佐藤学『教師というアポリアー—反省的实践へ—』世織書房、1997年、94-100頁。
- ⁴ 佐藤学「授業という実践」稲垣忠彦・佐藤学『授業研究入門』岩波書店、1996年、15頁。
- ⁵ 同上、22頁。
- ⁶ 臼井博『アメリカの学校文化日本の学校文化—学びのコミュニティの創造（認識と文化9）』金子書房、2001年、246-247頁。
- ⁷ 白松賢『学級経営の教科書』東洋館出版社、2017年、15-16頁。
- ⁸ 白松賢、前掲書、16頁。
- ⁹ 白松賢、前掲書、17頁。
- ¹⁰ KH corder は、樋口耕一氏が開発した分析用フリー・ソフトウェアである。詳細は、樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版、2014年を参照されたい。
- ¹¹ 「タグ」として、「生徒指導」「進路指導」「教科指導」「学習指導」「学級指導」「学級経営」「学級づくり」「学級運営」「学級担任」「教科担任」「信頼関係」「人間関係」「関係づくり」「部活動」「清掃活動」「特別活動」「学級活動」「教育活動」「部活動指導員」「集団生活」「集団づくり」「保護者」「専門職」「専門性」「専門教科」「教材研究」「生活指導」「学校教育」「学校生活」「学校安全」「生きる力」「考える力」「児童理解」「子ども理解」「生徒理解」「授業準備」「授業改善」「授業研究」を設定し、分析を行った。
- ¹² グラウンデッド・セオリー・アプローチについては、Barney G. Glaser and Anselm L. Strauss, “*The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*” Aldine Publishing Company, 1967. (=後藤隆・大出春江・水野節夫訳『データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか—』新曜社、1996年)、戈木クレイグヒル滋子『グラウンデッド・セオリー・アプローチ—理論を生み出すまで—』新曜社、2006年などを参照されたい。

¹³ 441 文書中、「男性」は 209 人、「女性」は 231 人、「学級担任」が 293 人、「管理職」が 56 人、30 歳までが 65 人、31～40 歳が 56 人、41～50 歳が 117 人、51 歳以上が 196 人となっている。

¹⁴ 分析の際には、文脈に留意しながら、対応するコード名（下位概念）をつけ、類似するコード名（下位概念）をまとめながら、カテゴリー（上位概念）の抽出を行った。絶えざる比較法を採用しつつ、上位概念を説明する事例が充実した時、それを上位概念として採用している。

¹⁵ 教師の自由回答記述には、カテゴリー間の関連が示されるような記述もみられたが、本稿の分析は、オープンコーディングの分析に留まっている。

引用文献・参考文献

白井博『アメリカの学校文化日本の学校文化—学びのコミュニティの創造（認識と文化 9）』金子書房、2001 年。

戈木クレイグヒル滋子『グラウンデッド・セオリー・アプローチ—理論を生み出すまで—』新曜社、2006 年。

佐藤学『教師というアポリアー反省的实践へ—』世織書房、1997 年。

佐藤学「授業という実践」稲垣忠彦・佐藤学『授業研究入門』岩波書店、1996 年、15-57 頁。

白松賢『学級経営の教科書』東洋館出版社、2017 年。

中央教育審議会「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」2015 年 12 月 21 日。

中央教育審議会「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について（答申）」2019 年 1 月 25 日。

Barney G. Glaser and Anselm L. Strauss, “*The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*” Aldine Publishing Company, 1967. (=後藤隆・大出春江・水野節夫訳『データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか—』新曜社、1996 年)

樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版、2014 年。